afterword

理事長　亀井善太郎

続けてきたからできること、これからも続けることの意味

今号では、ベトナムの先生たちの山形への旅を取り上げました。異なる価値観と出会い、自分にとっての”当たり前”が揺らぐとき、頭では理解してもそれを受け止めるのはなかなか辛いものです。日本という異文化の中で、それぞれの「揺らぎ」に向き合い、葛藤し、学ぼうとするベトナムの先生たち。その姿を見ていると、自分自身の学びの姿勢を省みたくなります。

先生たちの山形での学びが、ベトナムの子どもたちの学びの変化にどうつながるのか。この物語にはまだまだ続きがありそうでたのしみです。

ラオスから、ノンさんとニャイさんをお招きして開催したフォーラムでは、あらためて、二人のあたたかさと強さを実感することができました。AEFAの歴史は、彼女たちと共に歩んできたものと云っても過言ではありません。山あり谷ありいろいろありましたが、彼女たちから多くを学び、彼女たちの多くの助けを得て、ここまで来ることができました。

現場の厳しさは改善できたこともあれば、むしろ、より困難に直面していることもあります。それでも、一人ひとりの子どもや若者たちに、広い世界にチャレンジするための知恵と力、そして、勇気を与えたい、そのきっかけとなるのは日本からのあたたかい支援なのだという二人の言葉、これをしっかり受けとめたいと思います。

政治体制も文化も言葉も日本とは異なる中、それぞれの取り組みの中身が深まってきていると感じます。ラオス、ベトナム、そして、スリランカで学びの場を整える学校建設支援からはじまり、お互いに学びを深め合う現在の関係性に至るまでを振り返りますと、やはり、これまでの一つひとつの積み重ねによるものと気付かされます。どの国でも、学校や図書館の建設を継続し、質の高い教育の実現に尽力してきたからこそ、日本の私たちが、現地パートナーだけではなく、その向こうにいる現地の行政や教育関係者の信頼を得ることができるのです。

毎号掲載するプロジェクト候補校リストには支援者の方々のお名前を掲載しています。そして会報をお送りしている皆さまからのご支援があって、プロジェクトを進めることができます。日々の暮らしの中で、現地の子どもたちのこと、そして、奮闘している先生やNGOの方たちのことを「ちょっと」思い出して、ご支援を続けていただけるとうれしいかぎりです。

AEFA マンスリーサポーター 募集中

AEFA の活動を継続的に支援してくださる「マンスリーサポーター」を募集しています。サポーターの皆様からのご寄付は、アジア山岳少数民族の子どもたちの可能性をひらく教育支援プログラムのために活用します。

金額 (毎月)
月額 1,000 円（1口）から 5,000 円（5 口）まで選択できます。
また、児童・学生の方々もご参加いただきやすいように、月額 500 円のプログラムも設定しました。

登録方法
寄付プラットフォームとして実績ある「Syncable」を使用しています。クレジットカード決済が可能です。

1. 右下の QR コードを読み取り、Syncable の AEFA ページにアクセスしてください。
2. 「支援方法」より、「寄付する」を選択してください。
3. 「頻度」の欄で「毎月」を選び、「金額」の欄で月額を選択してください。
4. クレジット決済に必要な情報を入力してください。
5. 登録いただいたメールアドレスに Syncable からのメールが届きましたら受付の完了です。

Syncable
https://syncable.biz/
「アジア教育友好協会」で検索

個人と非営利団体を繋ぐプラットフォームサービス
Syncable（シンカブル）に登録しています

Syncable　https://syncable.biz/
「アジア教育友好協会」で検索
当サイト経由で AEFA 会費・寄付のカード決済ができます

AEFA Web & SNS
Web Site　Facebook　Instagram

私たちは各国のパートナーNGOと手を携えて活動しています。

ベトナム：Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
ラ　オ　ス：Association for Community Development (ACD)
タ　　イ：Raks Thai Foundation (CARE Thailand)
スリランカ：Rotary Club of Colombo (RCC)

AEFAフレンド会報

42号
2026年11月18日



特集　フレンドシップサークル「揺らぎ」から生まれる学び合い
第 17 回 AEFA フォーラム開催

AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

〒102-0074　東京都千代田区九段南 2-3-22　アーバンセカンドビル 3F　TEL : 03-6265-6490　FAX : 03-6265-6491

フレンドシップサークル、山形の夏

「揺らぎ」から生まれる学び合い ～自分を知り他者を知る

今年7月、ベトナムの先生たちを山形に招へいするプログラムを実施しました。103名もの希望者から選ばれた3人の先生たちと、ベトナムの現地パートナーであるCSDのスタッフ2名、AEFA理事3名、計8名のチームが、7月13日から19日までの7日間、山形市の小中学校4校を巡りました。感動あり、危機ありの、忘れがたい山形の旅でした。

フレンドシップサークルのスパイラル



©AEFA/CSD

「フレンドシップサークル」の始まり

AEFAは長年、遠隔地の分校の教室整備などハード面の支援とともに、子どもたち一人ひとりの考え方の土台や、周りの人たちとの関係性を育てる活動を大切にしてきました。レインボーライブラリープロジェクトもそのひとつ。少数民族の子どもたちに図書館を届け、読書習慣を育む活動を続けています。民族固有の言語（母語）と学校で使う言語（国語）が異なる環境で学ぶ子どもたちも多く、読書を通じて想像力や考える力を育みたいという思いから始まった取り組みです。

2024年、CSDのアインさんとマイホアさんを招へいし、山形で「図書館ワークショップ」を行いました。様々な民族の子どもたちがともに学ぶレインボーライブラリーと、多文化共生を目指す山形の図書館は、学び合えること、分かち合えることがあるのではないかと考えたからです。山形市内外の学校を訪問し日本の学校文化や図書活動に触れ、子どもたちと交流した、CSDの二人。その後、マイホアさんから「ベトナムと日本の子どもが半年間ほどオンラインで交流するプロジェクト」の提案がありました。たった一回の交流で日本の子どもたちに変化が起きたことを感じ、より長期的な関わり合いを作りたいと願ったのです。これが、ベトナムと日本の子どもたちの交流プログラム、「フレンドシップサークル」の出発点です。

交流が育む学びのスパイラル

フレンドシップサークルは、日本とベトナムの子どもたちがオンライン交流や時には直接交流を重ね、自分を知り、他者に耳を傾け、問いを育てる場をつくることを目指しています。互いを認め合いながら学び合い、未来へ向かう力を育んでいけるように。

考え方の中心にあるのは、「交流 → 揺らぎ → 自己理解 → 問い → 次の交流」というスパイラルです。出会いのなかで価値観が揺さぶられ、そこから自分が大切にしていたものに気づく。そして自分自身を見つめなおすなかで問いが生まれ、その問いがまた次の交流へとつながっていく。

ここでいう「揺らぎ」とは、異文化との出会いによってふと生じる「え？」「へえ！」という驚きであり、自分の当たり前が問い直される体験のことです。

世界全体に排他的な空気が流れる今だからこそ、交流を通して価値観が揺さぶられ、自分の当たり前を問い直し、相手にもまたその人なりの驚きがあると知る。そんな出会いを、子どもたちに届けたいのです。SNSの時代だからこそ、ほんものに触れ、自分で考え、自分自身の問いを見つける体験をしてほしい。揺らぐことを恐れず、その先にある問いに向き合う力を、このプロジェクトに関わるすべての人々の中で育めたら、と願っています。この循環はひとりの中だけで完結せず、気づきが周りへと波紋のように広がり、やがて多層的な「輪」となっていく。フレンドシップサークルという名前には、そうした重なり合う輪を人と人の交わりを通じて育てたいという思いが込められています。

今年、ベトナムの先生たちを山形に招へいするプログラムを立ち上げたのは、まず先生たち自身がこのスパイラルを経験し、子どもたちの学びを支えてほしいと考えたからです。日本の教育現場に身を置き、時には揺さぶられる経験を持ち帰り、問い直し、それぞれの学校での実践へつなげてほしい―そんな期待からの招へいでした。旅のテーマは、「自分を知り、他者を理解し、変化を育て、問いを生み出す学びの旅」。一度きりの研修で終わらせず、これから続く6か月間の交流、そしてその先を支える軸となる旅にすることを目指しました。

■滞在スケジュール■

7月13日(月)	来日、山形へ移動、ホームステイ（3泊4日）
7月14日(火)	天童市立高擶（たかだま）小学校 （6年生、田んぼ、調理実習）
7月15日(水)	山形市立南小学校（5年生、学習発表会） ／Pastel「幸せ」ワークショップ
7月16日(木)	寒河江市立陵南中学校 （中2、英語の授業・部活）
7月17日(金)	上山市立中川小学校 （小3・4複式、公開授業・事後研究会）
7月18日(土)	中川小授業について山形大学で振り返り、帰京
7月19日(日)	東京観光（東京国立博物館など）









左上）少数民族の衣装を紹介（陵南中）　右上）ヒルがいてもはだしで田んぼに入っていく子どもたちに驚く（高擶小）
左下）中川小の公開授業について振り返り（山形大学）　右下）学習発表会の5年生による演奏に「思わず涙が出た」の声も（南小）

山形への旅

CSDがRL関連校を中心に募集をかけたところ、103名もの先生たちが手を挙げました。そして、天童市立高擶（たかだま）小学校と交流するチャン先生（ゴックティエン1小学校教諭、教員歴9年、バクニン省平野部）、山形市立南小学校と交流するイエン先生（クアンチュン小学校教諭、教員歴8年、トゥエンクアン省山間部）、寒河江市立陵南中学校と交流するリック先生（校長、教員歴31年、トゥエンクアン省山間部）の3名が選ばれました。CSDのニーさん、マイホアさんも同行し、5名のチームが7月13日から19日までの7日間、ホームステイをしながら天童市・山形市・寒河江市・上山市の4校を巡りました。

ベトナムの先生たちの学び

各校での出会いは、それぞれに忘れがたいものでした。ベトナムの先生たちは、どの学校でも子どもたちが主体的に学ぶ様子に感銘を受け、教室の掲示物や学級通信、日記の活用など、日本の先生たちの学びの環境づくりが自由で個性にあふれていることに刺激を受けていました。

高擶（たかだま）小では、「ぼくたち田んぼやりたいんです」という子どもの一言から始まった稲作と、その実現のために担任の先生が子どもたちとともに地域の農家と交渉を重ねたうえ授業内容に繋げていった努力、さらに日記を通して子どもたちの内面の変化を丹念に見取る姿勢に、目を見張りました。

南小では、5年生の合奏と合唱に思わず涙するベトナムの先生たちの姿がありました。「あれほどの演奏になるまでの先生と子どもたち双方の忍耐と努力を思うと、深く心に響いた」と。また、誰も見ていない場所で床を拭く子どものエピソードを伝える「学級通信」にも目を留め、日々の学校生活の中で価値観が育まれていることを感じたそうです。

陵南中では、郊外にありながら都会の学校と差のない部活動や設備、物おじせず話しかけてくる生徒たちの姿勢に心を動かされていました。ベトナムでは街と山の学校の差がまだ大きいのです。ベトナム文化や言語を教える交流授業では、生徒たちが積極的で反応が非常によく、教えた先生たちも大いに楽しんだようです。

夜には、子育て支援団体「多文化子育てカフェPastel」主催の「幸せについて考える」ワークショップに参加。40人以上の多国籍な参加者と、「幸せ」で「豊か」な社会とは何かを語り合いました。学校教育と直接関係のないこうした対話は先生たちにとって初めての体験で、「視野を広げるとても良い機会だった」という声もありました。

この一週間は、学校の先生や子どもたちだけでなく、ホームステイを引き受けてくださった高橋家・笹原家・二戸部家をはじめ、数えきれない地域の方々にも支えられました。地域の方々との関係そのものからも多くを学んだ、とニーさんは話していました。

ベトナムの先生たち、最大の揺らぎ

最後の4校目に訪れたのは、「学びの共同体」を長く実践している上山市立中川小学校です。AEFA理事坪井が山形大学の森田先生と知り合っていたご縁で紹介いただき、他校からも大勢の先生が参加する公開授業に同行させていただきました。

全校生徒49人の、複式学級もある小さな学校です。実はここで、ベトナムの先生たちを揺るがす出来事がありました。

チャイムの無い学校、「教えない」教師、子どもたちが協力して進める学び―それは、ベトナムの先生たちがこれまで積み重ねてきたやり方への問い直しを迫るものでした。トゥエンクアン省山間部で教えるリック先生とイエン先生は、「この方法はベトナムで応用できない。教師がほとんど話をしないような教え方では、教師が怠けていると評価されてしまう。環境が整った小さな学校だからできるのだ」と関心を失い、午後の事後研究会が始まる前に会場を後にしてしまいました。ベトナムでの経験とあまりにも違う教師の在り方に、大きな衝撃を受けたようでした。

しかし、翌日の振り返りの場には、その二人の姿もありました。CSDのマイホアさん、ニーさん、そして旧バクザン省での「学びの共同体」の実践を少し見聞きしたことがあったチャン先生、山形大学の森田先生、前日の授業者である山川先生やひより先生が熱い対話を重ねるうちに、二人の聴く姿勢は少しずつ変わり、メモを取り始め、最後には自ら手を挙げ、問いを発するまでになっていました。その場に立ち会った森田先生はこう振り返ります。

「その人自身の日常と大きく異なるものと出会ったとき、一人だけで処理しようとすると拒絶反応になるのは仕方がないのだと思います。…驚いたのは、お二人ともあの中で発言をされたことでした。一人だけでなく、二人いたことが支えになっていたと思います。チャン先生が旧バクザン省の教師だということはなんともすごいことです。日本の専門家たちがじっくり取り組んできたことで踏ん張りが効いていたように感じていました。あの場の関係だけでなく、積み重ねてきた歴史が支えになっていることを改めて実感しました」。

孤立させないこと。それこそが「学びの共同体」の肝なのだと思います。授業を観察するなかで価値観が揺さぶられ、その揺らぎから目を逸らさずに問いを発し、自らを省みる。関わり合い、やりとり、語り合いのなかで心を開ける場があったからこそ、先生たちはこの循環を自らの中で回し、次の問いへと向かっていくことができたのでしょう。私たち同行者も、まさにあの語り合いの場で、「交流 → 揺らぎ → 自己理解 → 問い → 次の交流」というスパイラルが先生たちの中で動き出す瞬間に立ち会い、心が震えました。

CSDのマイホアさんとニーさんは、この一週間、どの授業、どの学校でも一言も聞き漏らすまいとメモを取り続け、疑問があればその場で問いを重ねていました。振り返りの場でも、称賛だけでなく、手法の効果と限界の両方に目を向けた深い洞察を示す場面が印象的でした。また、「教師が耳を傾け励ます姿勢が生徒の主体性に大きく影響すると、ベトナムの教室との対比で感じた」、「ベトナムでは限られがちな芸術教育への投資が、子どもの自信・想像力・心の健やかさを育てると気づいた」、「意義ある教育の変化には、ビジョンの共有・協働・信頼・継続的な振り返りという一貫した文化が必要」など、本質を捉えた感想を残しています。

今は、CSDとして、今後の交流プログラムに活かすべく試行錯誤を繰り返しています。

山形という土台、そしてこれから

旅を終えてあらためて感じるのは、この活動が、山形に既に存在していたいくつもの輪の重なりによって支えられていたということです。学校の先生方どうしのつながり、山形県青年国際交流機構の長年にわたる交流活動、多文化子育てカフェPastel、MSY在山形ベトナム人協会など、山形にはさまざまな団体があり、参加者の多くは複数の活動に関わりながら、活動と活動、人と人を柔軟につないでいます。ひと声かければすぐにホストファミリーを引き受けてくださる人財があり、仕組みがあります。こうしたつながりは今回のプロジェクトのために新たに作られたものではなく、地域活動の積み重ねの中で形成されてきた、山形の「社会関係資本」ともいえる財産です。フレンドシップサークルも、その既存のつながりの中に入れていただいたことで、地域の人々との出会いと学びを生み出すことができました。山形で大切に育まれてきた「多文化共生山形モデル」を構成する一つの要素にもなり得るのではないか―今回の旅は、その可能性を感じる機会になりました。

フレンドシップサークルを通じて人と出会い、心を揺さぶられた両国の子どもたちは、今はまだこうした地域や人と人とのつながりに支えられる側かもしれません。しかし、いつかその経験を胸に、今度は自分自身が誰かと誰かをつなぎ、そのつながりを支える土台となっていくのではないでしょうか。それも、私たちが楽しみにしていることの一つです。

今回の一週間は、はじまりです。「交流→揺らぎ→自己理解→問い→次の交流」というスパイラルは、常に回り続けます。山形で心を揺さぶられたベトナムの先生たちも、いま、それぞれの教室で、見たこと、聞いたこと、感じたことを問い直しながら、次の一歩を探しているところでしょう。

今後、ベトナムの先生たちはCSDと協力して、トゥエンクアン省でワークショップを開き、他の先生たちとも日本での経験を分かち合う予定です。日本とベトナムの子どもたちのオンライン交流も、これから6か月間続きます。その中で、また新しい驚きや戸惑いが生まれ、問いが重ねられていくことでしょう。「わからない」からはじまる学び合いは、教室の中だけでなく、社会で生きるのに大切なことではないでしょうか。私たちAEFAも、この揺らぎの中を一緒に歩きながら、心を開いて柔らかに学び合える場を、山形で、ベトナムで、そして私たちの身の回りで、焦らず少しずつ育てていきたいと思います。

(注: ベトナムの先生の所属は、来日時のものです)

本プロジェクトは、一般財団法人MRAハウス、独立行政法人国際交流基金特定助成金並びにAEFA会員のご寄付、ご協力によって行っています。

※「学びの共同体」とは?
教育学者・佐藤学氏が提唱し、アジアや世界へ広がる学校改革の理念・実践。目指す姿は「教室で誰一人見捨てない、全員が質の高い学びを」。子どもどうしが互いに聴き合い支え合い、教師は「教える人」から「子どもの学びを支える存在」へ。2005年ごろから旧バクザン省(現バクニン省)を中心に、日本の専門家と現地教育者が協働してきた歴史があります。







左)たくさんの学びの合間に、雄大な自然「蔵王のお釜」に癒され笑顔はじける先生たちから、チャン先生、マイホアさん、森田先生、山川先生、ひより先生、ニーさん、リック先生、イエン先生、坪井　右上)ホストファミリーと駅でお別れ(リック先生と高橋家)　右下)山形大学にて　左

感想と後日談



子どもの日記、バインミーづくり(高瀬小)
野球部に参加(陵南中)

●子どもたちから

・ベトナム語を教わりましたが、書くのも読むのも難しいなと思いました。
・一緒につくったバインミーがおいしかったです。具材も珍しかったので、家でも作って家族に食べさせたいと思いました。
・チャン先生とニー先生に会った時、本当に日本語が通じなくてめちゃくちゃ焦りました。でも、落ち着いて英語で話すと通じて嬉しかったです。
・コミュニケーションがすごいと思いました。最初は全く何を言っているのかわからず不安でしたが、料理の時や授業などを通して指を指したり、ジェスチャーをしたりすることで少し分かり合えるようになりました。
・相手の文化を何も知らないでいると、誤解があったりします。事前に知っておくと、相手との会話がもっと楽しくなると思いました。

●山形の先生たちから

二戸部先生(高瀬小):植えたばかりだった稲が大きく育ち、間もなく収穫を迎えます。「収穫したお米をベトナムの先生たちにも食べてもらいたい」という声も。一緒に作った生春巻きを、夏休みには家族のために作り、クラスで発表してくれた子もいました。

冨田先生(南小):ベトナムの先生方に演奏を聴いて感動したと褒めてもらえたことで、子どもたちが自分たちの歌や演奏に自信を持ち、より楽しめるようになっています。

菅原先生(陵南中):人懐っこい生徒たちが、ベトナムの先生には積極的でフレンドリーに映っていたと知り、安心しました。英語学習も「学校のルールをベトナムの先生にどう紹介するか」など、実際に使う場面を意識できるようになりました。

福島さん(AEFAサポーター、陵南中):同じ空間を共有し、逃げられない環境で外国の先生方と向き合う経験は、オンラインだけでは得られない貴重な学びであり、子どもたちの人生の土台になっていくのではないでしょうか。

●ベトナムの先生たちから

リック先生:大規模な学校統合があったばかりで新しいことがなかなかできませんが、これから始まる6か月間の日本との交流にしっかり取り組んでいきたいです。

イエン先生:日本の子どもたちが自分で考え、判断し、行動しているのがとても印象的でした。ベトナムではつい教師がサポートしてしまいます。今後の課題として、これからの交流の中からも引き続き学びたいです。

チャン先生:訪問した学校で日記が効果的に活用されていたので、私も9月の新年度から取り入れてみました。まだ始めたばかりですが、少しでも子どもたちの心に近づけるよう、学んださまざまなことを取り入れていきたいです。

2025年度より国際交流基金の特定寄付金制度の対象となりました。対象プロジェクトでは、寄付金の税額控除のメリットを受けることができます。
くわしくは事務局にお問い合わせください。

AEFA プロジェクト Now

2026年10月末現在

学校をつくる、ととのえる

国名・学校名・支援者名（敬称略）を記載しています

完成 ベトナム
ドイホン分校
株式会社カナオカ（国際交流基金特定寄附金制度）

中越戦争当時の戦火から逃れてきた人々が集住する地域で、8つの民族の子どもたちが学ぶ学校です。年々児童数が増え、4教室の新校舎を建設しました。11月に、日本からご支援された方たちが参加して開校式が開催されます。写真①

移転先調整中 ベトナム
サマン分校
一般社団法人 ゼブラ社会貢献支援協会（ZESCO）

2025年9月の台風被害で地滑りが発生、人的被害はなかったもの、村の民家が3軒流され、学校の教員室も破損してしまいました。安全な土地へ集落ごと移転するため、新しい土地の整地やインフラ整備が行われています。2026年中に住民の移転と学校建設が開始される見通しです。写真②

建設中 ベトナム
ホンクアン少数民族寄宿小中学校
株式会社ディアーズ・ブレイン

約600名の少数民族の児童生徒のうち、1/3の子どもたちが寮で生活しながら学んでいます。学校統合の影響で寄宿舎が不足し、1つのベッドに3人がすし詰めで眠っています。トイレと水場付きの寄宿舎を新設して、子どもたちの生活と衛生環境を改善します。

建設中 スリランカ
セント・ヨアチム タミル学校
エルセラーン1%クラブ

紅茶プランテーションに囲まれた学校で、保護者もプランテーション関係の仕事についています。学校は「時代にあわせた教育・道徳的人格と現代における課題解決に立ち向かえる理想的市民を育てる」を理念に掲げ、学業もクリケットなどのスポーツ等の行事も、盛んに行われています。

建設中 スリランカ
バーラティ学校
エルセラーン1%クラブ

中部州ヌワラエリヤにある、茶園に囲まれた、小学校から高校までの学校です。スリランカで約20%と少数派であるタミル人の子どものための学校です。学校の運営には、保護者をはじめ支援者が協力しています。

募集中 ラオス
ナカロン小学校

サラワン県ラオガム郡にあります。今の校舎は老朽化して危険な状態で、2教室+教員室の新校舎が必要とされています。最も優先度の高い学校です。写真③

現地調査中 ベトナム

**タインホア省・トゥエンクアン省・ラオカイ省・タイグエン省の4省にて調査中です。
候補校や現地状況については事務局にお問い合わせ下さい。**



①ドイホン分校



②サマン分校



③ナカロン小学校

子どもと若者の自立をささえる

継続が大切な案件のため、ご支援を引き続き募っています。

実施中 ラオス
リトルシェフ(栄養改善)
Junta Coffee

山岳地域の村は現金収入の手段が限られ生活が厳しいため、栄養不足により幼児や子どもの発育が遅れています。本プログラムは、学校菜園・養魚池等を設置し栄養と保健衛生について学び、調理実習を行います。食糧と栄養の補給になるほか、子どもたちが中心となって周りと協働しながら活動し、自分に自信をもってリーダーシップを発揮する教育支援プロジェクトです。また、子どもたちが大人たちに教えることを通じて、家庭や地域を変えていくプロジェクトです。

募集中 ラオス
先生基金
小牧修、国際ソロプチミスト伊勢原
小林弘英、中村洋子、匿名希望

先生や生徒の生活支援のための養魚池を校庭に作る資材や稚魚購入の資金援助、給料が出なくても子どもたちの為に教えているボランティア先生への支援、教員養成校や大学で学ぶ若者たちへの支援などが、経済危機が長期化する今、ラオスで最も必要とされています。

募集中 マレーシア
CSO学校運営支援
水野恵子　服部駒子　野口豊子　Selesalah Yoga

Chin Student Organization（略称CSO)は、ミャンマー北西部チン州の山岳地帯から、国軍による弾圧や武力衝突を逃れてきたチン族難民の若者たちが運営する、マレーシアにある学校です。設立21周年を迎えました。これからも子どもたちの学びたい、を支えるため継続的な支援が必要です。

募集中 ラオス
再生可能エネルギー設備・自主管理運用のための地域人材育成支援プロジェクト

ラオス南部サラワン県山岳部の無電化9村に太陽光発電設備3基を整備します。発電設備は、村人たちが自ら管理、メンテナンスして、継続的に使えるようにしていきます。このため、サラワン県職業訓練校の支援を受けて技術を学ぶ研修プログラムを実施して、これを担う人材育成にも取り組みます。インフラ整備を通して村人の参加を促し、自主運営できる力を身につける教育支援・村づくりプロジェクトです。

募集中

募集中のプロジェクトは、みなさまのご寄付をお待ちしているプロジェクトです。
詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。

図書館をつくる、本に親しむ

図書館を建設して本や本棚をそろえ、1年間の読書活動を支援します。図書館を建てた後、読書習慣を身につけるための多様な活動を行い、子どもたちの成長を1年間見守り応援します。

建設中 ベトナム
ジャオアン小中学校
エルセラーン1%クラブ

ムオン族・ターイ族などの児童生徒が98%以上を占める学校です。現在の図書室は、小中学校に各12㎡の小さな部屋しかありませんが、屋外のスペースを活用するなどして工夫して読書活動が行われています。

建設中 ベトナム
ジャオティエン小中学校クークー分校
エルセラーン1%クラブ

ムオン族などの児童生徒が学びます。現在は約10㎡の小さな部屋に本棚を置き、図書のほか教材や備品の収納場所ともなっています。先生たちは、子どもたちが本の世界と読書活動を通して考える力や想像力や創造性を養ってほしいと願い、プロジェクトへの協力を約束しています。

建設中 ベトナム
ドンルオン小学校
株式会社初田製作所

タインホア省の山岳部にある学校で、ムオン族・ターイ族・チュット族の子どもが学んでいます。現在は、30㎡ほどの部屋を図書室としても使用していて、読書スペースが不足していますが、各クラス週に2回ずつ読書活動を行っています。

建設中 ベトナム
ホンクアン少数民族寄宿小中学校
エルセラーン1%クラブ

タイー族、ザオ族など多様な民族の児童生徒が学びます。言語の課題を抱える少数民族の低学年児童と先生とのコミュニケーションを、中学生が手伝っています。子どもたちがベトナム語を学ぶためにも、読書活動が必要とされています。

建設中 ベトナム
ドンイエン小学校
エルセラーン1%クラブ

タイー族、ヌン族など多様な民族の児童が8割を占める学校です。司書の先生が工夫を凝らし、限られたスペースと図書を活用して定期的に読書活動を行っています。レインボーライブラリーで、更に読書活動を充実していきます。

建設中 ベトナム
チュクチョン分校
阿部佳世子（国際交流基金特定寄附金制度）

ベトナム北部ラオカイ省の山の中にある、ザオ族の子どもたちが学ぶ学校です。2023年度にAEFAプロジェクトで学校建設を支援しました。「少数民族の子どもには、なおさら、読書を通して生きる力を身につけてほしい」と校長先生は願っています。

建設中 ラオス
オンノイ中高校
エルセラーン1%クラブ

南部サラワン県にある学校です。近隣の7つの村から約150名の生徒が学ぶ地域の中心基幹校ですが、図書室はありません。図書館が出来れば、生徒が「図書ボランティア」として、先生と一緒に貸し出し簿や図書館の利用ルールを作ったり、主体的に活動します。写真④

現地調査中 ベトナム
ティエンフー小学校

タインホア省にある、ターイ族やムオン族の子どもたちが学ぶ学校です。先生たちの教育への熱意が高く、プロジェクトへの協力も約束しています。

現地調査中 ベトナム
タンソン分校

タインホア省にある、ターイ族やムオン族の子どもたちが学ぶ学校です。図書館のほかトイレの新設と、老朽化した5教室校舎の修繕も必要とされています。

現地調査中 ベトナム
バオリン拠点分校

タイグエン省にある、タイー族、ムオン族、ターイ族などの子どもたちが学ぶ学校です。図書館のほか、寮生のためのキッチンやトイレも必要とされています。（2015年度新校舎を建設支援したクオイチャオ分校は、バオリンの分校です）

現地調査中 ベトナム
バンフック拠点分校

タイグエン省にある、タイー族、ザオ族、フモン族などの子どもたちが学ぶ学校です。現在は読書のためのスペースや十分な図書がないため、読書活動やSTEM活動ができる機会や環境を待ち望んでいます。

現地調査中 ベトナム
ギエンロアン少数民族半寄宿小学校

タイグエン省にある、タイー族、ムオン族、ターイ族などの子どもたちが学ぶ学校です。図書館のほか、寮生の生活や衛生状態を改善するため、キッチンとトイレの新設も必要とされています。写真⑤

募集中 ラオス
ファイルーシ小学校

南部チャンパサック県にある学校です。10年前からAEFAプロジェクトで小学校・幼稚園を支援。学業もスポーツも活発で、地域のモデル校となっています。先生たちの団結力も強く意欲的で、子どもたちの学びのため読書活動に参加したいと希望しています。写真⑥

募集中 ラオス
ダシア中高校

南部サラワン県にある学校です。近隣4村から約180名の生徒が通う地域の基幹校ですが、図書室はありません。図書館は、子どもたちの大切な居場所ともなっています。読書を通して学びを深め、学校活動を充実させていきます。



④オンノイ中高校



⑤ギエンロアン少数民族半寄宿小学校



⑥ファイルーシ小学校

第17回AEFAフォーラム開催

私たちとラオスの関係を結びなおす

7月5日（日）、東京・市ヶ谷のJICA地球ひろば国際会議場で、第17回AEFAフォーラム「ラオスの子どもたちの今とこれから〜私たちとラオスの関係を結びなおす〜」を開催しました（後援：独立行政法人国際協力機構）。

ラオスでのパートナーNGOであるACD(Association for Community Development) から、代表のノンさんとニャイさんを迎え、ACDの理念、ラオス南部山岳地域や村々の暮らし、子どもたちや若者のために彼らとともに取り組んでいる活動について、お話いただきました。

会場には、子どもからシニア世代まで、フォーラム初参加の方を含む約90名が集まりました。



左から、ニャイさん、岩品雅子さん、ノンさん

子どもたちを支える意義はますます重要に

ラオスではインフラ整備が進み、国全体では貧困率が低下しているというデータがある一方、都市と地方の格差は大きく拡がっています。ACDが活動する南部の山岳地域では、5歳未満の子どもの35.6%が慢性的な栄養不良にあります。長引く経済危機とインフレが人々の暮らしを圧迫し、学校の校舎があっても先生が出稼ぎに行かざるを得ず、また、燃料費の高騰によって、先生たちの通勤の費用や子どもたちの往復の送迎の負担が大きくなってしまうため、登校日を減らす（例えば、火曜と木曜は休校）という現実があります。かけがえのない成長と学びの時に子どもたちがこうした困難に直面している今、「子どもと若者が、外の世界を知るため、そして外の世界や時代の変化に備えるため、彼らを支える意義はますます重要になってきている」と、ノンさんとニャイさんたちは、強い信念をもって、直面する課題と未来を見据えた取り組みを続けています。「データや情報よりも、私たちのチャレンジ、そこにある思いを理解してもらえたらうれしい」。その言葉には、一人ひとりの成長、一つひとつの家族の暮らしに、長い年月をかけて向き合ってきた実感が込められていました。

親や地域を変える力になる、子どもたちの変化

ACDが目指すのは「子どもの幸福」です。子どもが安全に健やかに暮らし、希望に満ちた未来を思い描けること。学校建設や図書館整備による教育環境の改善を通して、コミュニティの発展を支えるプロジェクト、子どもたちが主体となって活動する環境プロジェクトや栄養改善プロジェクト、木を伐採せず森の恵みを生かす非木材林産物（NTFP）の持続可能な取り組みなどを続けています。

子どもたちは、学んだことを自分たちだけのものにはしません。“お兄ちゃん先生”“お姉ちゃん先生”として、小さな子どもたちの憧れ、そして、目標となります。さらには、日々の手洗いの大切さ、バランスのよい栄養を取ること、ゴミをきちんと分別・再生させて環境を守ることの意義について、家族や地域の人たちに伝えていきます。子どもたちの行動の変化に触れることで、新しい知識と習慣は家庭へ、そして村へ。学びの輪が少しずつ広がり、地域を変える力になっていくのです。





左）フォーラム参加者　右上）幸せや健康を祈りながら手首に糸を結びあう





左）ノンさんによるラオスの竹製品紹介　右）最年少の参加者にバーシーの糸を結ぶ

その「きっかけ」は遠い日本からやってくる

ニャイさんは、「AEFAプロジェクトの一番の成果は、人が育ってきていること」と語りました。2005年に新校舎が建設されたパチュドン小学校の卒業生で、かつて「先生基金」の支援を受けたプークさんは、今ではACDのスタッフとして、次世代の若者のために力を尽くしています。新校舎で人が育ち、育った人が、今度は誰かを支える力になる、その起点となるのは、やはり「きっかけ」です。その「きっかけ」は遠い日本からやってきます。一人の人生を変え、そして、たくさんの家庭や地域がちょっとずつよい方向に変わっていく、そのためにも、「学びたい」「挑戦したい」という願いをもつ、子どもや若者たちに、一歩を踏み出す「きっかけ」を届けたいと願って私たちは活動を続けています。

バーシー：結ばれた、あたたかい絆

フォーラムの後半では、お二人が会場のそれぞれのテーブルを回って、ラオスの竹製のもち米入れや手作りの算数の教材などを紹介してくれました。あちらこちらから「ノンさん！」「ニャイさん！」と声が上がり、二人への質問が次々と寄せられます。言葉を交わすたびに、参加された皆さんとの距離がぐっと近づいていくように感じました。テーブルごとの対話では、「ラオスの子どもたちのこれから、私たちにできること」をテーマに、参加者それぞれが感じたことを分かち合い、新たなプロジェクトのアイデアも出てきました。

「『子どもたちが大人を変えていく』というノンさん・ニャイさんたちの思い、そして、その実践に驚かされた」、「厳しい現状だからこそ、続けていかねばならないという二人の強い思い、そして、やさしさとあたたかさが心に残った」「『記憶や知識は失われることがあるとしても、人と人のあたたかい絆はずっと残る」というノンさんの言葉の通り、今日いただいたこの感触は、私の心の中にずっと生き続けていくように思います。そして、会場全体に流れるあたたかさにも、胸を打たれました。生きた活動は、関わる方々の真摯なありかたによって生み出されるものなのですね」など、たくさんの感想が寄せられました。

フォーラムのむすびに、健康や幸運、繁栄を祈るラオスの伝統儀式「バーシー」をみんなで行いました。ノンさんとニャイさんはこの日のために、人々の崇敬を集める首都ビエンチャンのお寺から、バーシーの糸を頂いてきてくださいました。この日の最年少で、去年に続いて参加してくれた女の子の手首に、その糸を結びながら、「悪いことは出ていき、幸運がたくさんやってきますように。健康でありますように」と祈る二人。その後、会場全体でお互いの幸せを願って糸を結び合い、笑顔が広がりあたたかな雰囲気となりました。

その温もりは、ノンさんとニャイさんのあたたかなお人柄そのものでした。お二人ともっと話したい、ラオスのことをもっと知りたい——楽しい交流の中で生まれたそんな気持ちが、ラオスとのつながりの始まりかもしれません。

今回のフォーラムには初めてAEFAを知る方にも多くご参加いただきました。ノンさんから「たくさんの方に会うことができて本当に幸せです。ラオスは発展している途中で色々な課題がありますが、ACDの活動を知り、何かを感じてくれたらうれしいです。」とメッセージをいただきました。

これからもラオスの子どもや若者に「きっかけ」を届け、未来をつくる力を応援するために、ACDとAEFAはチャレンジを続けます。フォーラムに参加された皆さん、そして参加できなかった皆さんも、私たちの歩みにどうぞ力を貸してください。

当日、ラオス語の通訳をつとめてくださったのは、NGO職員およびJICA専門家としてラオスで11年半活動された岩品雅子さん（現在は笹川平和財団研究員）でした。JICAの技術協力プロジェクト「ラオス　コミュニティ・イニシアティブによる初等教育改善プロジェクト」ではチーフアドバイザーを務め、ACDとともに村教育開発委員会の育成や、村人主導による学校改善活動に取り組んだそうです。同志ともいえる岩品さんの丁寧な支えにより、ノンさん、ニャイさんは母語で安心して語り、思いをしっかり伝えることができたのではないでしょうか。岩品さんのご協力に心より感謝いたします。

10年の時と国境を越えて…

学びの種が、夢となって届くまで

ある日、私たちのもとに届いた一通の手紙。それは、10年前、ベトナムの小さな学校にまかれた「学びの種」が、確かに育っていたことを知らせてくれる、うれしいお便りでした。

手紙をくださったのは、埼玉県の西武文理大学で「NPO・ボランティア論入門」を担当されている渡辺和代先生です。

受講生の一人、ベトナムからの留学生グエン・ヴァン・フェンさんがAEFAの支援により建てられたリウガン分校の出身であることを知らせてくださいました。

リウガン分校は、2017年エルセラーン1%クラブのご支援により、ベトナム東北部バクザン省（現バクニン省）に建てられた学校です。現在は統合により学校としての役目を終え、地域の公民館として活用されています。

フェンさんが渡辺先生の授業で提出したレポートには、新校舎が建てられたことへの感謝、開校式で日本から訪問した支援者と交流した楽しい思い出、学校建設プロジェクトが自分の人生に与えた影響が綴られ、「ボランティア活動は、助ける人と助けられる人という一方的な関係ではないと考えます。支援する側は社会貢献を通して学びや喜びを得ることができ、支援を受けた側は、その経験を将来誰かに返していくことができます。将来は、自分も誰かを支援できる立場になりたいと思うようになりました」と結ばれていました。

渡辺先生はレポートを読み、このように若者がやりがいと夢をもって熱心に勉強を続けている、その根っこにある“種をまく教育の力”を感じて私たちに連絡をくださったとのこと。おかげで、AEFAは時と国境を越えてフェンさんとつながることができました。

同封されたフェンさん手書きのカードには、「皆様のご支援のおかげで今の私があります。感謝の気持ちを胸に、これからも夢に向かって努力していきます」と、丁寧な日本語で記されていました。現在、フェンさんはホテルマンになる夢に向かってホスピタリティを学び、献血活動や留学生を支援するボランティア活動もしています。

フェンさんは11歳の時、開校式で初めて外国の人に会い交流したことがきっかけとなり、日本という国に興味をもちました。それから日本に留学したいと夢を描き、高校在学中には家から４ｋｍ離れた日本語センターに通って日本語の勉強を始めました。遠い日本へ留学するにあたっては、両親はとても心配しましたが、「小学校をつくってくれた人たちがいる日本なら・・」と応援してくれるようになりました。今では、日本で学ぶ姿を誇りに思っているとのこと。

フェンさんから、リウガン分校のその後についても聞くことができました。地域の人々はボランティアで学校の敷地や周辺道路の清掃を続けていたそうです。校舎は今も大切に受け継がれています。

渡辺先生のお便りに始まった人と人とのつながりが、フェンさん、そのご両親、エルセラーン1%クラブの方々、そしてリウガン分校の地域の人々の思いを届けてくれました。10年前にまかれた学びの種がフェンさんの夢を育み、その夢を応援する人々をつないでいます。

フェンさんに続き、一人でも多くの子どもや若者たちが自分らしく学び、夢を抱き、その夢に向かって歩んでいけるように。その種となる学びの場を、これからも私たちは皆さまとともに届けていきます。





上）米倉庫だった教室（新校舎建設前）で学んでいた子どもたち　下）地域のボランティアによって清掃され美しく保たれている旧リウガン分校校舎



フェンさんからのカード
左側の写真はリウガン分校開校式、当時11歳のフェンさん



日本に出発する前のフェンさん　お母さんと

色の持つ力

AEFA理事／建築家 佐川 旭

建築の設計にあたりデザインの重要な要素のひとつに色を決める作業があります。色決めは誰にでも出来るのですが、空間全体としての統一感や調和などが人間の心理や生理の状態に大きな影響を与えるということを考慮する必要があります。

人の持つ色に対する感性・感覚は、生まれ育った地域や家の環境や、その後の様々な生活環境を通して培われ積み重ねられていきます。それがある時何らかのきっかけでよみがえり、色鮮やかな映像とともに、心の奥にあった記憶や感情を呼び覚ましてくれることがあります。

私達のつくるベトナムでの学校や図書館の色決めは現地のNGOに任せていますが明るくあざやかな色同志の組み合わせが多い印象を受けます。たとえば屋根はグリーンで壁はイエロー、あるいは屋根はレッドで壁はブルー、さらには部屋ごとに室内の壁を違う色に塗り分けられた学校もあります。



レインボーライブラリー（ベトナム、アムヒウ小学校）

そこに使われる色は彩度・明度ともに高く、はっきりとした配色はその土地の自然に由来した花と緑、空と大地などに見られるような対比を感じます。

ベトナムは北から南に長く亜熱帯気候から熱帯モンスーン気候で驚くほど多種多様な植物の花を見ることが出来ます。こういった自然がつくり出す色や色の対比は現地の人にとっては必然の色の選択になるのでしょう。

少数民族が住む山岳地帯では子供たちが過ごす住居空間において、あまり色彩を感じさせるものはありません。したがってカラフルな色使いの学校や図書館は子供たちにとって特別な場所として印象づけられます。これらの学校、あるいは図書館で過ごした子供たちが成長し、自らを振り返った時、その建物の色彩とともにそこで過ごした大切な時間が思い出されるでしょう。

知らないことを学ぶ喜び。沢山の友人との出会い。語らい。遊び。今の自分をつくり上げてくれた過程を再び見つめ直すことで、これからの自分が何を表現してどう生きるのかの手がかりになってくれるかもしれません。

ハードとしての建築物に、ソフトとしての色が加わることで、子供たちの心の中に目に見えない力が生まれることをひそかに期待しています。